

トリアス祭 特別企画

プログラム 平成22年11月5日 金曜日 16:00~18:00  
 京都府立医科大学 看護学舎1階 階段教室  
 司会：富本 雅子 (医学科4年生)  
 第1部：講演会 外園 千恵 (視覚機能再生外科学 講師)『これからの医療を支える若い方々へ』  
 第2部：座談会 フリーディスカッション  
 「貴方の明るい未来のために」～働く女性医療従事者の在り方を考える～



●講演・座談会要旨

トリアス祭でのセンター特別企画として開催し、約50人の参加を得た。

第一部の講演会では、本学の視覚機能再生外科学教室の外園先生に講演を行って頂いた。外園先生は、本学を卒業され、4人のお子さんを育てながら勤務されている。学生時代は、理数が好きで、患者さんに喜んでもらえる医療提供がしたい、研究は面白そう、海外に行くような仕事がしたい、結婚・育児もしてみたい、という夢を漠然と持っておられたそうである。しかし、出産すると生活が一変し、仕事を辞める理由はたくさんあるけれど、仕事を続ける理由が見つけれなかったとのこと。学生時代に描いていた夢が否定されたわけでも仕事が嫌なわけでもなく、「とりあえず頑張ってみよう」という気持ちで仕事を続けてこられた。

育児と仕事を両立させていく為に必要なこととして、保育所、職場の理解、家族の理解、自分の心のバランスを保つことの4つを挙げられ、次第に協力してくれるようになった配偶者とのお話、家事代行の方のお話もされた。

心のバランスの取り方では、ロールモデルを得られたことや「子供をみてもらいながら仕事をする」と肯定的な方が周りにいたことが幸せて、ご自身も周りの人の支えとなれるような役割を果たしたいと話された。

医師は1人前になるのに時間がかかり、更に女性はその時期に結婚や出産が重なってしまうが、数年間完全に休むのではなく、キャリア形成の為に細々とでも仕事を続けられるポジション構築の必要性を感じておられ、ご自身でも育児と仕事の2者択一ではなく、1週間の中で強弱をつけながら「続けられる仕事」「続けたい仕事」を行う工夫をされているとのこと。

学生へのメッセージとして、学生の中に人生をイメージすることが大切ということ、医学の仕事は続けてこそ自分の経験が活かせるので、休むことがあっても続けてほしいということ、興味を広く持ち様々な経験をしてほしいとエールを頂いた。

第二部の座談会では、会場からの質問やご意見に、外園先生が答えられた。家事代行はどのように探したか、育休について、家族が家事に協力されるようになった経緯等の質問が出た。外園先生のご家族も会場にこられ、ご家族への質問も出るなど非常に盛り上がった。様々なことに対してマイペースに人と比較せずにやりたいことをやってきたということも、外園先生が仕事と家庭を両立できた1つの要素でもあると締めくくられた。

●アンケート

ご意見等(抜粋)

- ・大学内で年齢や科の敷居を超えて、このような企画・講演会があることは素晴らしいと思います。ロールモデルとして、先輩の先生方のお話を聞き、質問ができてよかったです。引き続きこのような企画をお願いします。
- ・一人でこもらずにこのような問題を話し合えるように心がけていくことと自分にできる仕事を楽しみながら続けることの決意を新たにしました。
- ・外園先生の講演を聞かせていただいて、女性医師が働き続けることの大変さと、逆にそのやりがい等を知ることができました。また、自分の将来についてきちんと考えてみようと思いました。



病児保育室開室のご案内

病児保育室につきましては、関係者の皆様のご協力により、2011年7月開室を目指して準備を進めております。



お知らせ

- 1 男女共同参画推進センター講演会を開催します  
 (平成22年度大学院教育ワークショップFDと同時開催)  
 日時 平成23年2月19日(土)午後13:00~13:50  
 場所 キャンパスプラザ京都  
 講演 「ワークライフバランスの重要性」  
 講師 清野佳紀先生(大阪厚生年金病院名誉院長)

2 在宅支援の一環として

- \*テレビ会議について  
会議システムの試行を行いました。今後、本格活用に向けて、作業中です。
- \*医中誌Webについて  
医学中央雑誌のWeb版が遠隔地からご利用いただけるようになりました。アクセス先→<http://login.jamas.or.jp>

3 ホームページを開設しました

編集後記

本学に男女共同参画推進センターが開設され、NewsLetter創刊号発行を迎えることができました。メンバーが手探りで始めたイベントでしたが、十分な反響を得たことは多くの方々の関心の高さが基盤にあったからだと思います。男女ともに人間らしく生き生きと働ける環境づくりを目指して、今後も活動を続けていきます。(K.I)

男女共同参画推進センター

〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路上ル梶井町465  
 電話(FAX): 075-251-5165  
 Eメール: [miyako@koto.kpu-m.ac.jp](mailto:miyako@koto.kpu-m.ac.jp)  
 URL: <http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel>



平成22年度 文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業 一しなやか女性医学研究者支援みやこモデル

山岸 久一 学長挨拶



平成22年度の文部科学省の振興調整費「女性研究者支援モデル育成」プログラムに採択されたことにより、平成22年7月に男女共同参画推進センターを開設し、センター長として矢部教授に就任していただき「しなやか女性医学研究者支援みやこモデル」事業を展開しています。

この採択にあたっては、羽室特任教授に多大な御助力をいただくとともに、矢部教授を中心に本学の有志の方が集まって全力を尽くしてこの調整費獲得に努力をしていただいたことに、感謝いたします。

本学の医学科卒業生の女性比率は、平成22年度34.1%と過去12年連続して25%を超えています。教員約300人に対し、医学科における女性教員の割合は約9%の水準に留まっています。

女性医師・女性研究者が少ないという原因は色々あるかと思いますが、彼女たちのキャリア形成時期とライフサイクルが重なるというところに大きな原因があるのではないかと考えます。文部科学省の振興調整費の意義は正にそこにあり、当大学においても女性医師・女性研究者が生涯にわたって医師・研究者を続けられることによって社会貢献できるような環境整備を積極的に行おうと考えています。

教職員の皆さんをはじめ、当大学関係の多くの方々のご協力を得て、事業を進めていきたいと考えていますので、今後とも御協力をよろしくお願い申し上げます。

矢部 千尋 男女共同参画推進センター長挨拶



平成22年度文部科学省科学技術振興調整費・女性研究者支援モデル育成「しなやか女性医学研究者支援みやこモデル」の採択を契機に、本学にも男女共同参画推進センターが開設されました。これから平成24年度まで、外園(眼科)と三沢(小児科)の2名の副センター長と、伊東(病理)、田辺(医学教育研究センター)の女性メンバーを中心に後藤コーディネーターと女性医学研究者支援と子育て支援に取り組みます。

当面の最大の課題は学内調査で最も要望の多かった、「病児保育室」の開設です。今後センターが、男女を問わず本学構成員の効率的で柔軟な教育・研究・診療活動の実現にお役に立てれば幸いです。

各ワーキングの活動

広報・啓発WG		在宅支援WG	
内容	ワークショップ等の開催、啓発資料作成、HP作成 等	内容	ネットワーク構築、テレビ会議システム、文献オンライン整備 等
メンバー	伊東准教授(分子病態病理学)、河田教授(生体構造科学)、三沢学内講師(小児発達医学)、田辺特任講師(医学教育研究センター)、矢部教授(病態分子薬理学) 等	メンバー	矢部教授(病態分子薬理学)、図書館長の福居教授、同資料主任の枚田司書、花井教授(物理)、橋本学内教授(集中治療部)、伊東准教授(分子病態病理学)、田辺特任講師(医学教育研究センター) 等
保育室設置検討WG		就労形態WG	
内容	病児保育室設置等検討 等	内容	勤務体制・採用枠拡大に向けた制度設計、研究支援補助者の導入検討 等
メンバー	三沢学内講師(小児発達医学)、岩井病院長、外園講師(視覚機能再生外科学)、看護部長、事務局長、付属病院事務部長、病院管理課長 等	メンバー	外園講師(視覚機能再生外科学)、岩井病院長、河田教授(生体構造科学)、矢部教授(病態分子薬理学)、事務局長、管理課長 等

京都府立医科大学男女共同参画推進センター設立記念シンポジウム

**プログラム** **女性医師によるより良い医療提供をめざして**

**司会:伊東 恭子** 京都府立医科大学分子病態病理学教室 准教授

14:00 はじめに  
**山岸 久一** 京都府立医科大学 学長

14:10 **記念講演**  
「女子医学生・女性医師のためのキャリア教育」  
**川上 順子** 東京女子医科大学第一生理学教室 主任教授  
東京女子医科大学女性医師再教育センター長



15:00 **パネルディスカッション**  
「女性医師を離職させないために、いま、私たちに出来ること」  
**山岸 久一**  
**川上 順子**  
**武曾 恵理** (財)田附興風会医学研究所北野病院研究所副所長  
ejnet(※)理事  
**桑原 仁美** 京都府医師会 理事  
**ブレヴォ田辺智子** 京都府立医科大学医学教育研究センター  
坂崎診療所レディースストック長

15:50 おわりに  
**矢部 千尋** 京都府立医科大学薬理学教室 教授  
男女共同参画推進センター長

※ejnet 特定非営利活動法人 女性医師のキャリア形成・維持・向上をめざす会



2010年11月27日(土)、平安会館において、シンポジウム「女性医師によるより良い医療提供をめざして—みやこモデル—」が開催され、学内外から約70人が参加しました。山岸学長からの挨拶の後、東京女子医科大学の川上先生からの記念講演を受け、パネルディスカッションで熱心な討議の後、参加者からの質問も出され、今後の取組みの方向性が示されました。参加者からは将来への勇気が持てたという感想も聞かれました。

**<川上先生の講演要旨>「女子医学生・女性医師のためのキャリア教育」**

川上先生には、近年のライフスタイルの変化や女性医師の増加、臨床研修の義務化による「価値観の変化と多様性」が言われる中で、社会的な支援として、キャリア形成とセーフティネットの両面の支援が必要であるということ、また、柔軟性のある女性医師像を描いたキャリア教育の重要なポイント、さらに、東京女子医科大学で実際に行われているキャリア支援、セーフティネットの支援の具体的な内容、特にセンター長をお務めの再教育センターのご説明、再教育を広く知ってもらうためのe-ラーニングのお話をいただいた。

**キャリアデザインとキャリア教育**

医科大学・病院での、キャリア教育に何が求められているのか、ライフスタイルの変化、価値観が多様化する中で、自分の医師としての生き方を学生時代から考える必要が出てきた。加えて女性医師・女性研究者としてのキャリアとライフサイクルとのバランスを図りながら考えるという、キャリアデザインとキャリア教育が求められるようになった。

**医師としての統一した価値観があるのか**

価値観の多様性はますます進み、進歩するし、社会にとって多様性は大切なもの。しかし、医師には最低限共通認識しておくべき価値観があり、それは、医師として社会貢献するという認識である。医療界においては、価値観を教育するためのロールモデルが男女ともに大切だと考える。医者として、あるいは人間としての、ロールモデルとなるのは、男性が女性のロールモデルになっ

てもいいし、逆でもいい。

**女性医師の社会貢献**

みんなが『国境なき医師団』に入らなきゃいけないとか、必ずしも大きな貢献である必要はない、様々な方法をそれぞれの立場で出来る社会貢献、それを自分の行動の基盤に据えるというキャリア教育が望まれる。女性医師ができる社会貢献の一番は、生涯医師を続けること、医者を辞めないことである。女性医師には患者さんにとってのある貢献、よく話を聞くとか、話しやすいなどということ是非常に社会的にも価値あるものといえる。

**生涯医師として働く女性医師への2つの方向性への支援**

1つは、大学病院などで、キャリアを追求していく女性医師にはそれを続けるためのキャリア形成への支援が必要であり、もう1つは、一旦途切れたとしても復職するためのセーフティネットとしての女性医師支援が必要である。生涯医師を続けるために、両方にとって絶対必要なものは『育児支援』と考える。

**二つの価値観のぶつかり合い**

もっとも重要な問題として、女性医師には、自分と仕事、家庭と仕事、そして自分自身の中で2つの価値観が絶えずぶつかり合っているところがある。ある人が「人間というものはいかなる場合でも、好きな道、得手の道を捨ててはいけない。」と語っているが、「好きな道を選ぼう」ということがとても大事である。

**大切なこと**

“どんなに細くとも臨床との絆を絶対切ってはいけない”ことを強調したい。時によっては、続けることが大変になってくる場合があると思うが、絶対切ってはいけない。そのために周りがどう支援していくのか、ということだと思ふ。

**キャリア教育をされる側に伝えたいこと**

“価値観のゆらぎ”ということは当たり前であり、あれかこれかではなく柔軟性を持つことが大事である。一番やりたいことは何かを考え、具体化する力を養ってほしい。

真にやりたいことが浮き彫りになってきた時に初めて次に動くことが出来る。他人がどう考えるかではない。自分がどうやりたい

のか、何をしたいのかということをも柔軟性を持って考えていただきたい。

**キャリア教育する側に伝えたいこと**

“価値観のゆらぎ”は当たり前であるとの認識が大事である。解決するのは女性医師自身であるが、周囲の理解が必要であり、話を聞いてほしい。“諦めない姿勢”を育成すること。教育するご自身の価値観の多様性を持って教育してほしい。

**4つの女性医師像とキャリアデザイン**

女性医師像として①キャリアを追求し、医務機関や病院での役割を得る②地域医療に貢献し、社会的活動のリーダーとして活躍する③仕事も家庭もがんばりたい④家庭が大切、医師としても働く、の4つが考えられる。そして、自分が将来どのように進んでいくのかを具体的に考える際のポイントとして、①自分が心から望む生き方をはっきりする②その実現にはどのような能力が必要か③その能力開発に必要な環境は何か④それには、今しなければならぬことは何か⑤将来に必要なとされることは何か⑥自分が持っている長を如何に生かすかの6つを挙げられた。そして、学生生活の過ごし方や研修先の選択、家庭との関わりをどのようにするかも考えていくように。

**目指すべき女性キャリア教育**

女性医師も自分が生きるだけで精一杯だけれど、どのような医療人をめざすかという将来を展望できる生き方を考える教育であってほしい。日本の将来医療における女性医師の役割を考える

**パネルディスカッション『女性医師を離職させないために、いま、私たちにできること』**

『女性医師を離職させないために、いま、私たちにできること』をテーマに行われたパネルディスカッションは、山岸学長による本学の現状と課題等の説明でスタートし、パネリストの先生方や会場に参加の先生方等から、様々なご意見が出された。

「女性医師支援を進めていく上で大切なこと」では、川上先生から、まずは女性医師自身の意志や努力があった上での支援が基本ということ、トップの協力や専任事務員の配置が不可欠であるということをご経験を踏まえてお話し頂いた。また、桑原先生からは、京都府医師会としては女性医師バンクやトレーニングセンターを今後の女性医師の支援活動に役立てていきたい、女性医師や女子医学生がこのような話を聞く機会があれば、刺激になるというご提案をされた。

「本学でまず実施していくべきことは何か」では、府医師会が事務方との連携の必要性や広報の重要性、学内・関連病院などの本学を取り巻く地域に対し疎通性の面で役に立てることがあればというお話があり、田辺先生からは、ピラミッド型のメンター制度を体験された中で良かった点を挙げられ、OB・研修医・学生など様々な年齢・性別・経験の人の意見を聞く機会を設けることが大切であり、本学でも取り入れられないかとの提言をされた。

女性医師支援の基本となる「保育支援」については、大学のフレキシブルなバックアップ体制の必要性について川上先生よりお話し頂き、武曾先生からは、女性医師が育児をしながら研究を続けていくには夫の協力が不可欠であり、日本の男性ならではの育児の関わり方の模索も、今後必要となってくるのではないかとのお話もあった。

桑原先生からは、京都府医師会が55歳以上の府内の女性医

教育を是非やっていただきたい。

**東京女子医科大学の取り組み**

全国唯一の学部長と大学病院長が女性医師である東京女子医科大学の先進的な取り組みについて、具体的なご紹介があった。

<男女共同参画推進局の活動>

- ①女性医師・研究者支援センターでは、保育支援事業、キャリア形成支援事業、勤務体制検討事業などを行っている。特徴的な取組として、「キャリア形成のために1年間短時間勤務をする」ことを公募される予定であるとのこと。
- ②女性医師再教育センターでは、復職支援事業、キャリア支援事業を学内外学外問わず対応し、セーフティネットとしての成果をあげられていること。e-ラーニング事業の果たす役割が大きいこと。
- ③看護職キャリア開発支援センターの取り組み など

最後に、女性医師の復職支援をしているが、最終的には男女を問わずすべての勤務医が、良好な環境で自分の理想の医療を実現できる環境を作ることを目的としている、明快で情熱あふれるお話に、参加者からも活発な質問が出、「将来への希望がみえたよう」、「今後の活動への指針が明確になった」などの感想が寄せられました。

詳細についてはHPをご覧ください

URL:<http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel>

師に対して行ったアンケートに、女性医師が研究を続けていくのが今よりも厳しい環境の中で続けてこられた先生方の温かい思いが多くあり、それを今の女性医師や医療界全体に還元していきたいようにしたいとの熱い思いも語って頂いた。

会場には、WHOでご活躍の川野先生がお出でいただいております。「女性医師の問題は男性にとっても問題」であり、「性別に関わりなくキャリアにおける多様性を認め、様々な機会をオファーしていくことが男女共同参画が定着していくカギとなる」など、国際的な観点からのご発言があり、本学附属病院の神経内科の中川先生からは、ご自身の子育ての話を基に男女問わず医学生自身のしっかりした意志や努力の大切さ、社会全体の在り方を考えることの必要性についてお話しされた。武曾先生が東京女子医科大学や北野病院の病児保育の利用者は男性が増えており、育児に男性が関わってくる雰囲気広がりがつつあり、今後ますます希望が膨らんできているというお話しで締めくくられた。

